

P1-010

乳児院の食事場面における子どもの年齢構成の違いによる直接養育職員の援助体験の特徴：小規模グループケアでの支援の模索

大塚 己恭¹⁾、青木 紀久代²⁾

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科¹⁾、
白百合心理・社会福祉研究所²⁾

【目的】 乳児院では 2013 年より大舎制から小規模グループケアへの移行が進み、2017 年には 140 ケ所の内 85 ケ所の施設が移行している（厚生労働省，2019）。小規模化により養育形態が変わり、直接養育職員（以下、援助者）が年齢差のある子どもたちに同時に関わることが増えている。食事場面では年齢差が大きすぎると、年齢差のない場合に比べ、食事援助に困難が生じやすくなるとわかっている（大塚・青木，2019）。

本研究では、子どもの年齢構成が違う食事での援助者の援助体験の特徴を明らかにし、小規模グループケアでの支援を模索する。

【方法】 A 乳児院で月齢が 18 ヶ月未満の子ども同士の食事（18 ヶ月未満群）、18 ヶ月以上の子ども同士の食事（18 ヶ月以上群）、子どもの月齢が混合の食事（異年齢群）を設定し、援助者が食事後に感想を自由記述した記録を分析対象とした。なお、本研究はお茶の水女子大学の倫理委員会の承認を得て行われた。

39 場面の記録の内容を意味ごとに 158 個の文章に分けた。KJ 法でカテゴリを作成し、数量化 3 類で 3 群の特徴を分析した。

【結果と考察】 数量化 3 類の結果、2 軸による累積寄与率は 34.75% だった。それぞれの軸の固有値は第 1 軸が .44 ($0 \leq \lambda \leq 1$)、第 2 軸が .29 であった。第 1 軸は「やりやすさ—困難」、第 2 軸は「食事中心—社会性中心」とした。

Ward 法によるクラスター分析を行った。18 ヶ月未満群を含む第 1 クラスターは、第 1 軸のやりやすさ領域と第 2 軸の食事中心の領域にあり、食事介助を中心に積極的に声かけを試みることがわかった。18 ヶ月以上群を含む第 2 クラスターは、第 1 軸のやりやすさ領域と第 2 軸の社会性中心の領域にあり、コミュニケーションを中心に応答的な関わりを模索する傾向があった。最後に、異年齢群を含む第 3 クラスターは第 1 軸の困難領域と第 2 軸の軸上にあり、援助者と子どもが共に食事をとることが難しく、食事環境を整えようとするのがわかった。

年齢差のない食事では援助者は子どもの発達に合わせた援助を行えるが、年齢差のある子どもたちへの同時介助では、食事を成立させることにも困難さがあるとわかった。年齢差のある食事では、食事介助が必要な子どもは援助者の側に、会話ができる子どもは視線が合う位置に座らせ、会話しながら食事介助ができるようにし、発達による関わり方の違いを考慮した配置にするなど養育環境を工夫し、援助者が子どもの QOL を保証できる関わりが行えるようにする必要がある。